石黒広昭著

書評『子どもたちは教室で何を学ぶのか―教育実践論から学習実践論へ』

東京大学出版会　2016年2月　A5判　256頁　¥3,672（税込）

大越健斗（東京大学大学院）

本書は、子どもたちが学校で自覚せずして何を学んでいるのかを検討している。特に、子どもの学びを構成する環境（制度や慣習、学びを構成する道具や教師の行為、子ども自身の文脈など）を踏まえ、いかに子どもたちが自らの周りの環境を意味づけるのかに注目している。

学びとは教授によって規定されるのではなく、子ども自身が自らの周りの環境を独自に意味づけることでなされるという立場から、本書は書かれている。そのため、どのような教授がなされたか、子どもがどのような反応したかではなく、その教授を子どもがどう受け取ったか（意味づけたか）、なぜ子どもはそのような反応をしたかに注目する。この立場に立つことで、本書は子どもにとっての意味という観点から子どもの学校での経験を捉えることに挑戦している。

本書は、様々な場面・文脈における子どものふるまいを検討している。第1章では、入学したばかりの小学1年生が、その後の3カ月でいかに「主体的」に授業の成立へ協力するようになるのかを検討している。第2章では、授業中に生徒が自身の疑問をわきに置き、形式的な授業の成立に共謀している事実を見出し、その背景を検討している。第3章では、教室での「書き言葉」の学習場面を検討し、「書き言葉」が目的を持たずただ教師から提示された課題を解決するための道具となってしまう場合もあることを見出し、その背景を検討する。そこでの検討から「書き言葉」の学習が、自らを捉えなおし、発達を支援する道具となるための示唆を提示している。第4章では、教室の建物としての特徴や学級規模、子どもの日常生活の空間・就学前施設の空間と学校の空間の違いから、学校という特殊な空間でなされる子どもの学びを捉えている。第5章では、教師の子どもの問題行動への対応場面で生じるジレンマの構造を検討し、子どもがなぜその行動をとるのかを捉えることが必要であるとの主張を展開する。そして、具体的な事例を検討し、子どもの問題行動の背景の一つとして、子どもが自らの居場所を作るための交渉の結果という視座を提示する。第6章では、ニューカマーの生徒の学校での学びをもとに、異なる文化を持つ子どもの経験を捉えている。そして、ニューカマーの生徒が単に日本語を学んでいるだけではなく、授業参加を通じて、自らのアイデンティティへの交渉を行っていることを見出している。最後に、第7章ではそれまでの章を受けて、授業や教育実践をどのように捉えるべきかを論じている。

著者の石黒が書いているように、本書は「限られたエピソードを通して一学習実践研究者が観た世界を開陳しているだけのもの」（p.15）かもしれない。その意味では、本書は石黒の認識枠組みの下、石黒が観た教育実践を対象に考察されており、子どもが何を学んでいるのかについて限定的な知見を提示するにとどまる。しかし、本書が提示する立場と具体的なエピソードから見出された視座は、教師や研究者など教育関係者が子どもにとっての学びを多角的に捉える助けとなる。本書の拓いた次なる課題は、教育関係者が自らの見え方を自覚・共有し、議論することでより子どもの側から見た学びを重層的・多角的に捉えること、そして、そこでの知見を教育実践へつなげていくことだろう。そのための視座を本書は提示している。

本書は、学びが行われている場と文脈を踏まえ、子どもの側から学びを捉えるための視座を提示しており、子どもにとっての学びを豊かにしようと奮闘している教育関係者の一助となる良書である。